

---

# 春の彩 ~ side story...光 ~

優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

春の彩 ↗ side story . . . 光 ↗

### 【NZコード】

N6441M

### 【作者名】

優

### 【あらすじ】

朝のラッシュの時間。だが、電車にほとんど人がいない。ここは「ど」のつくほど田舎であるからだ。

そして、その電車に一人の男子高校生が座っていた。

よくいえば、自然豊かな町。  
俺的にはただの田舎。

こんな場所で君に会えるなんて  
思いもしなかつた

\* \* \*

「ねえ、暇！」  
「え…」

朝のラッシュの時間。だが、電車にほとんど人がいない。  
ここは「ど」のつくほどの田舎だからだ。

この電車のある車両に二人の男子高校生が座っていた。  
扉近くには、身長は160後半といったところだろうか。  
少し小柄で、目が大きくて、髪がふわふわとバーマがかつている大  
祐がいる。

その隣には、大祐とはまるで正反対な遙。

身長は180以上。

目は大きくてつり目氣味だが、どこか抜けているようなナチュラル  
ボーカルだ。

「はるかー、お前も話せよー」

「え…？お前が話しそぎなんじゃ？」

「ほー、はー！話して？さんはー！」

「……」

「黙るなよー！」

遙は小さくため息をついた。

大祐は朝から晩まで元気だが、遙は朝に少し弱い。

だからと言って、朝から大祐と一緒にいることが嫌というわけではないので不思議なところだ。

「も・仕方ないなー」

「え…」

「俺が話しちゃるーー！」

「…やつぱり」

「くすくす」

いつからいたのか、大祐と遙と同じ車両に彼らと同じ制服を着た女の子が向かいの端の席に座っていた。

大祐と遙が彼女の方を見ると、あわてて口元を押さえられる。

「ー」「めんなさい…」

「あ、いえ。」

遙がそう言つと、女の子はにっこり笑つた。

「二人とも、仲良しなんですね」  
「……」

いつもならおしゃべりな大祐が何も答えない仕方がないので、遙が答えた。

「あ、まあ…幼馴染です」  
「へえ。なんかぱつと見似てないのに、雰囲気がなんとなく似てる  
気がする」  
「そうですか?…つて大祐、なんか話せよ?」

遙が大祐を肘でつついた。  
すると、大祐ははつとした。

「お、俺…波川大祐つていいます!」  
「あ、私は楠木さやか」  
「よーよろしく!」  
「うん、よろしくね」

大祐のたどたどしい自己紹介をきっかけに、その日の朝は3人で学校に行くことになった。  
大祐は、少し緊張しているようやたらテンションが高い。

さやかはふんわりとした雰囲気のある子で、ずっと大祐の話を楽しそうに聞いていた。

そして、遙はとすると普段通りなんとなく大祐の話を聞きながらいつもと変わらない周りの景色を楽しんでいた。

\* \* \*

「なあ、はるか…」

昼休み。

ご飯を食べ終えて中にはの木陰でのんびりとしていた遙のところに大祐がやってきた。

「ん - ?」  
「今日の朝の子さ、いい子だつたよね」  
「ん? ……あ - 、うん。」

遙にはもう、記憶から薄れていったことらしかった。  
けれども、大祐の中にはとても印象に残っているようだ。

「なんかさ、仲良くなりたいんだよね」  
「ふ - ん。ま、頑張ってみれば?」

遙はあくびをしながら木によりかかった。  
大祐は遙の傍にしゃがむ。

「俺さ… あんなにかわいい子初めて見た。」

「まあ、普通にかわいいとは思うけど」

「え？ 遥も思つた！？」

「え…いや、一般的にね？」

「そ…だよね」

大祐は大きくため息をついた。  
そして、思う。

高校に入学して何も変わらなかつた。  
昔と同じように遙が傍にいて。

ただ、のんびりと一日を過ごして。

けれど、今日の朝の時間だけこか違う。

彼女の声と姿とが目にも耳にも焼きついて離れない。  
朝の出来事だけが、頭の中でぐるぐる廻る。

嫌じやない、感覚。

まだ、大祐はこの気持ちの意味をしらない。

気付くのは、もっと先。

次に来る春、彼女との距離が近づいた時。  
その芽にきづく。

こんな場所で君に会えるなんて  
思いもしなかった

(後書き)

この短編は

春の彩 の side story です。

春の彩はサイトの方で続きを連載中

ぜひそちらもどうぞ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6441m/>

---

春の彩 ~ side story...光 ~

2010年10月10日07時51分発行